

一次救命処置 (BLS) 実施をためらう要因に関する一考察 ～看護大学生に焦点を当てて～

笠原美寿々¹⁾、金子佳世¹⁾

1) 新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】繰り返し BLS 技術を学ぶことで、受講者は実践に向けて自信を持つ一方、実際に BLS が必要とされる場面を想定した場合、半数以上で、BLS を実施しないという報告がある。また、BLS 未受講者、BLS 講習受講済みに関わらず、過半数が知識や手技に不安を抱えているという。看護大学生当事者の実感としても、学内で BLS 演習を繰り返してもなお、実際に必要とされる場面を想定すると、多くの場合で、ためらいを感じる事が推察される。そこで、本研究では看護大学生に焦点を当て、BLS が必要な場面で実施をためらう要因を明らかにし、改善策を検討することを目的とした。なお、本研究は、新潟医療福祉大学、倫理審査委員会による承認を得て行われた。(承認番号：17703-160701)

【方法】質的帰納的研究。BLS 授業を受講済みの学生を研究協力者とした。各グループ 5 名、2 グループに対し、30 分から 1 時間程度のフォーカスグループ・インタビューを行った。インタビュー結果は、IC レコーダーに録音後、逐語録に起こした。逐語録を読み込み、「BLS 実施をためらう要因」に関連する記述を抽出し、類似する内容をサブカテゴリー、カテゴリーとして分析した。

【結果】看護大学生が BLS 実施をためらう要因として、4 カテゴリー《》、17 サブカテゴリー【】、103 コードが抽出された。以下、各カテゴリーについて、記す。

《倒れている人・場所によって救助に関わるべきか迷う》
「知らない人に自分がいきなり (BLS) やって、もして時、全部 (責任が) 自分になっちゃう」との思いがあり、【傷病者がまったくの他人の場合、自分が率先して救助しづらい】。一方、【傷病者が知り合いや近親者の BLS 実施には責任を負える】と考えていた。また、【傷病者が知り合いや近親者の場合、自分も助けたいと思う】気持ちがあるが、【傷病者が子どもだと、怖くて手が出せないかも知れない】という。また、【周りに何も無い場所だと、(BLS に) 関わるかもしれない】と場所による影響も考えられており、《倒れている人・場所によって救助に関わるべきか迷う》が抽出された。

《助けたい気持ちとひとりで責任を負うことを避けたい気持ちの間で揺れる》【周囲に自分よりも優秀な人がいるかもしれないという期待】がある一方で、【一人だけではなく、誰かと一緒なら実施できそう】だという。「ひとりの命がね、かかっているからね、自分に」と感じ、【自分が

「主」の立場は避けたい】思いと【実施しなかった場合の罪悪感を予感する】【看護学生として、助けたいと感じる】など、《助けたい気持ちとひとりで責任を負うことを避けたい気持ちの間で揺れる》ことが、BLS 実施のためらいに繋がっていた。

《BLS 実施に対する自分の判断と技術への不安》【自分の判断や対応により、さらに状態を悪化させてしまいそう】【自分の BLS 技術は未熟だ】と考えていた。また、【練習したことのあるシナリオから外れた場合の判断や対応に対する不安】もあるほか、【本物の人間に対する BLS 実施時は未知の世界】と感じていた。

《「死」に直面することへの恐怖が BLS 実施を躊躇させる》「(子供は) からだが小さい (から怖い)」「もしなんか悪くしちゃったときに、子どものほうが、お父さんお母さんがちょっと怖い」など【子どもの「死」は想像し難く、怖い】と感じていた。また、子どもでなくても【死は、受け入れ難くて怖い】ことや、「自分のせいでもっと悪くなって死んじゃったらなって不安があって、あんまり (AED) 使えない(と思う)」と、【AED の使用は死を想起させる】ことが表出されていた。《「死」に直面することへの恐怖が BLS 実施を躊躇させる》ことは、BLS 実施をためらう根本的な要因であった。

【考察】一般的に講習で教えられる BLS は、傷病者は演習室で、「意識がなく倒れている状態」に限定されている。例えば、傷病者に呼吸があった場合など、講習と異なる状態に遭遇すると、学生は判断や対応に苦慮する。判断と対応に迷う場合は、救急車要請の電話を切らずに、指示を仰ぐことを教えていく必要があると考える。

また、傷病者がどのような状態か、誰か、どのような場所か、周囲に協力者がいるかなどにより、一人では救助に向かえない場合があると考えられる。傷病者、場所、協力者の有無など、現実在即した様々な状況を想定した BLS 講習を行う必要があると考える。

BLS をためらう根本的な要因として、「死」に直面することへの恐怖があった。通常の BLS 講習では、マネキンを用いて、傷病者の「意識なし」の状態を判断する手技を教えるにとどまる。BLS 講習においては、生身の人間の「死」に直面する状況を想起するなど、自分自身の死生観を感じられるような働きかけも必要かもしれない。

【結論】看護大学生を対象に BLS が必要な場面で実施をためらう要因として、倒れている人や場所、自分が負う責任、自分の判断と技術への不安、死の恐怖が関係していることが明らかになった。